

川田順造著 『日本を問い直す—人類学者の視座』

曹 起虎^{*}

いわゆる「^{フィールド・ワーク}現地体験」こそ、人類学・民族学・民俗学といった学問体系においては不可欠な要素であるといってよい。著名な文化人類学者である川田順造氏は、旺盛な精神力をもって地球の隅々まで歩き、各地で現地体験をしてきた。川田氏が、こうして絶えず「老益壯」を示しながら自ら直接現地を訪れ、「見て、考えて、調査する」なかで、国家・民族・歴史などに力点を置いて著したのが、昨年末に出版された『日本を問い直す—人類学者の視座』である。

本書は、ある一つの地域におけるフィールド・ワークの成果だけを著したものではない。これは、川田氏が開発途上国から先進国に至るまで、地球上のここかしこの国をまわり、「歴史意識」を確かに堅持しながら現地体験を重ねるなかで得られた結果である。川田氏による詳細な現地体験に基づいて書かれている点についてみれば、ジャンルは異なるが松尾芭蕉の『奥の細道』を彷彿とさせるものがある。にもかかわらず、本書は「灯台もと暗し」のものでは決してない。本書で触れられるのは、日本から遠く離れた国々についてはばかりではない。自国である日本はもちろん、隣国が過去に受けた古傷も取りあげており、それをより実証的に解明しようとする力作である。

川田氏は本書のなかで、本書を出版した青土社の提示する「脱亜入欧・和魂洋才の近代化プロセスで、日本人は何を得、何を失ったのか？」という問いに答えるかたちで、戦争責任・人種差別・文化的アイデンティティーといった日本の歴史認識を課題とし、中国・台湾・朝鮮（主

に韓国）から、アメリカ・ドイツ・アフリカ諸国と比較考察し、日本の現在を大胆に問い直している。この意味で、本書は人類学者、川田氏の畢生のフィールド・ワークの成果であるといえる。

川田氏は、1934年に東京で生まれ、東京大学教養学部教養学科（文化人類学学科）を卒業している。その後、フランスのパリ第5大学で民族学博士号を得ている。川田氏は、人類学・民俗学・民族学のみならず、広く歴史学・考古学といった研究分野の壁を越えたさまざまな知識と可能性を内包している。こうした広い知識と問題意識に基づいて書かれた本書は、30章にも及んでいる。本書の構成は、以下のとおりである。

1.幼時の音の年代記（クロニクル）から、2.この悲劇的な罪障消滅、3.台湾を考える、4.台湾に学ぶ、5.「歴史」の記憶、だが誰にとっての？、6.原住民または先住民をめぐって、7.いま、「脱亜論」を読む、8.脱「脱亜論」へ、9.国家を見据え、だが国家を超えて、10.「天安門」にこだわる、11.政治的であること、12.続・政治的であること、13.人間が国家に帰属するということ、14.黒人であること—この永遠の問題、15.「黒人であること」が投げかけ続ける問題、16.「白い心、黒い仮面」、17.「黒い皮膚」の自己主張、二つの極限、18.アイデンティティー、この“身元”不明の曲者、19.再び、日本と台湾について考える、20.「植民地」を求めた「帝国」、21.八月一五日、靖国・千鳥ヶ淵・東京都慰霊堂で、22.加害者と被害者をどのように分けるのか？、23.戦争体験は伝えられるか？、24.追悼する者とされる者と、25.「この悲劇を二度とくりかえすまい」、26.暗黙の了解を排除する、27.語り伝えるべきものは何か、28.では、何ができたか？、29.権力はいかに抗うか、30.単一史観は可能か？必要か？

このうち、1.幼時の音の年代記（クロニクル）から、2.この悲劇的な罪障消滅、3.台湾を考え

^{*} 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

る、4.台湾に学ぶ、5.「歴史」の記憶、だが誰にとっての？、6. 原住民または先住民をめぐる、7.いま、「脱亜論」を読む、8.脱「脱亜論」へ、9.国家を見据え、だが国家を超えて、10.「天安門」にこだわるといったものはもちろん、19.再び、日本と台湾について考える、20.「植民地」を求めた「帝国」、22.加害者と被害者をどのように分けるのか？、23.戦争体験は伝えられるか？、24.追悼する者とされる者と、25.「この悲劇を二度とくりかえすまい」、29.権力はいかに抗うか、30.単一史観は可能か？必要か？といった章も、東アジアを中心とした重要な問題意識から出発した内容であるといえる。

筆者は、2009年と2010年の8月15日、川田氏を尊敬してやまない数多くの人々とともに、東京でおこなわれたフィールド・ワークに参加した。これは、東京都内で三大国立慰霊施設と呼ばれる靖国神社・千鳥ヶ淵・東京都慰霊堂を順に巡るという内容であった。そのために、「八月十五日、靖国・千鳥ヶ淵・東京都慰霊堂で」と題された本書の第21章で描かれた内容は、筆者にとってとりわけ印象深く、大きな感慨とともに筆者の胸に蘇ってきた。

川田氏は10年余り前から、「年課」として、8月15日の意味を問うための現地体験を催してきたという。2009年の8月15日には、筆者を含めたさまざまな立場の人がこの現地体験に参加した。このときの参加者を国別に示すと、日本人は川田氏を含めて5人、台湾人2人、ドイツ人1人、韓国人2人というものであった。

第21章のなかに、「公正な戦死者の祀り方はありうるか」という小見出しがあり、そこには次のように書かれている。

靖国神社に正面から入って、大鳥居をくぐると、遙か前方に聳え立っているのは、言わずと知れた大村益次郎の銅像だ。明治二六年に建てられたこの像は、日本最初の西洋式銅像といわれる。なぜ彼の像がここにあるかといえば、大村益次郎は、靖国神社

の前身東京招魂社の生みの親だからだ。(中略)ところで、大村益次郎は軍政家ではあったが、軍人ではなく、京都の宿で同じ長州の過激派に刺されたのがもとで、敗血症で入院して亡くなっている。それでも靖国に祀られているのは、招魂社の生みの親だったからだろうか。(中略)

戦死者の祀り方は、生死を賭けた戦いが基にあるだけに、「公正」を期することは、極めてむずかしいのであろう [pp.254-257]

これは、川田氏が日本人として愛国心を持っていながら、愛国志士として軍人であった人物が靖国に祀られるのが望ましいことであることを惜しがっているのではないかと感じられる。川田氏は、戦死者の祀り方こそ生死を賭けた戦いが基になるので、大村益次郎の銅像もより公正な基準の基に建立されるべきであったと考えたのではないだろうか。

次に、最終章の「30 単一史観は可能か？必要か？」という章について、その内容を辿ってみたい。この部分も先の21章と同様、川田氏の案内により筆者も参加したフィールド・ワークを基に書かれたものである。ここでは、本書の355頁にある「複数の史観を対比させた、近代史博物館は可能か？」という小見出しの基に書かれた川田氏の言葉を取りあげてみたい。

地下鉄九段下から靖国大鳥居までの、ピラ配り、署名・カンパ活動では、外国人参政権反対、村山元首相のアジア諸国への侵略謝罪と慰安婦をめぐる河野洋平談話の撤回要求は、昨年までと変わらず。今年新しいものとして目立ったのは、台湾出身の英霊2万8000柱に感謝し、台湾を日本政府に正式に認めさせようとする署名運動と、中国共産党政権による、ウイグル人や南モンゴル人の弾圧、法輪功愛好者の迫害や生体からの臓器摘出移植などへの抗議だった。日韓併合100年に当たる今年、韓国側からのピラはなく、大鳥居前で日本人団体が、併

合肯定のチラシやパンフレットを配布していた[pp.355-356]。

ここで、一つ触れておきたいのは、「日韓併合100年に当たる今年、韓国側からのビラはなく、大鳥居前で日本人団体が、併合肯定チラシやパンフレットを配布していた」という引用文についてである。「日韓併合100年に当たる今年」は、韓国では、「国恥の100年」として、一年間さまざまなマスコミや多くの国民たちによって叫ばれたり、報道されたりしていた。川田氏は、「共生」あるいは「相生」という言葉を単純に考えておらず、これからのより友好的な日・韓両国の関係のために用いている。川田氏のこうした意見は、地球上に暮らすさまざまな人々の共生に向けて、それぞれの国が共生や相生を志向するべきであるという考えに基づくものであろう。つづいて、川田氏は次のように述べている。

それにしても戦争犠牲者の祀り方は、東京の中だけでも何と多様なのだろう。無宗教の国立慰霊施設計画は進まない一方で、8月15日の靖国神社参詣者は、翌日の神社側の発表では、今年は昨年より一万人多い16万6000人だった。遊就館の入場者も、8月15日だけで1万人を超えたという。(中略)明治維新以来の日本がたどった道が、靖国史観によってそれなりに明快に、すぐれた展示技術を駆使して示されている。(中略)私は遊就館の展示に示されている靖国史観を、無下に否定したくない。そこには、明治以後の日本が体験した出来事と、払った多大な犠牲と、それらに対する想いをめぐる、私たち日本人のある側面での「本音」が籠められている。だからこそ、いまでも8月15日1日だけで、1万人を超す入館者があるのだ。そこから学ぶべきことは多い[pp.357-358]。

これまでも述べてきたが、筆者も川田氏とフィールド・ワークをともにしており、このときの様子は現在でもありありと思い返すことが

できる。これらから読みとれるのは、隣国の台湾や韓国との「共生関係」ないしは「相生関係」ということが日本政府の志向すべき課題であるとする川田氏の考え方である。

さらに、川田氏の「私は遊就館の展示に示されている靖国史観を、無下に否定したくない。(中略)私たち日本人のある側面での『本音』が籠められている。だからこそ、いまでも8月15日1日だけで、1万人を超す入館者があるのだ。そこから学ぶべきことは多い「p.356-358」という率直な構えないし心情に、筆者は大きな親近感を感じることができた。川田氏は、つづけて以下のように書いている。

千鳥ヶ淵戦没者墓園では、平和フォーラム主催の集会で、民主党議員と社民党党首の追悼の言葉を聞き、私たちも献花したあと、移動した墨田区の東京都慰霊堂では、東京都神社庁と都内各支部合同で、毎年8月15日に神職や楽師が来て行なう慰霊祭に参列した。祭壇が神道式から仏式に戻されるのを待って、私は灯明と線香を供え、東京大空襲で遺体も見つからなかった親戚や知人の冥福を祈った。同じ立場と思われる地元の人たちも、三々五々訪れ、合掌して行く。全国から大型バスで参拝者が集まる靖国と違って、ここは犠牲者の遺族が地元なので、お参りも普段着感覚だ。

お堂の右脇に9年前に造られた、空襲犠牲者の名簿を地下に安置した扇形の花壇が池を囲む「記憶の場所」は、小学生から公募するデザインによって、四季に花が植え替えられる。私たちが訪れたときは、「世界をつなぐ輪」が、植え込んだ花で描かれていた [pp.356-357]。

ところで、一昨年墨田区の東京都慰霊堂に訪れた際の雰囲気に関しては、直前に引用した内容との間に差異が見つかる。本書の「24 追悼する者とされる者」とをたどると、

千鳥ヶ淵墓園のあと、(中略)両国の東京都慰霊堂に行った。(中略)関東大震災の

時、陸軍被服廠あとの更地に避難した大勢の人たちが焼け死んだのを弔って、その土地に昭和5（1930）年に建てられたものが現存している。200坪の講堂があり、三重塔がその奥にある。三重塔は高さ約41メートルで、基部は納骨堂になっている。震災記念堂は、その後太平洋戦争中のアメリカ軍の空襲の犠牲者で、各地に仮埋葬された身元不明の遺骨を、昭和23（1948）年から納骨堂に改葬し、戦災者整葬事業が完了した昭和26（1951）年に東京都慰霊堂と改称した。（中略）本堂に向かって右手の公園内に、泉水を要の位置にして扇形に斜め上方に（中略）広がった花壇をしつらえた、「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」がある。平成13（2001）年3月に、一般からの寄付によって建てられたこの碑の内部には、東京空襲犠牲者でここに祀られている人々の名簿が納められている [pp.281-283]。

とある。

以上のように慰霊施設の一つ一つを正確に描写している点を見ても、やはり鋭い観察眼を持った川田氏がフィールド・ワークに賭ける思いを理解することができるだろう。さらに、「朝鮮人虐殺追悼碑も」という小見出の下には、次のようにある。

慰霊堂脇の植込みには、関東大震災のときの流言蜚語がもとで、おもに本所・深川で虐殺された、およそ6000人の朝鮮人（またしても、下三桁に0がつく恐ろしい概数だ！）を追悼する石碑が建てられている。正面には、黒御影石に「追悼」の二字が大きく刻まれ、その下に「関東大震災朝鮮人犠牲者」と印されている。この下に水平に、やはり漆黒の御影石に「この歴史永遠に忘れず在日朝鮮人と固く手を握り日朝（筆者註：日韓）親善アジア平和を打ちたてん」、その左下に、人名と思われる判読できない文字が、力強い達筆で刻まれている

[p.286]。

さらに川田氏は、この追悼碑建立の由来について、黒御影石に刻まれた文字を引用している。

「1923年九月発生した関東大震災の混乱のなかで、あやまった策動と流言蜚語のため6千余名にのぼる朝鮮人が尊い生命を奪われました。私たちは、震災50周年をむかえ、朝鮮人犠牲者を心から追悼します。この事件の真実を識ることは不幸な歴史をくりかえさず、民族差別を無くし、人権を尊重し、善隣友好と平和の大道を拓く礎となると信じます。この碑の建設に寄せられた日本人の誠意と献身が、日本と朝鮮両民族の永遠の親善の力となることを期待します。

1973年9月 関東大震災朝鮮人犠牲者/追悼行事実行委員会」 [p.286]

川田氏がこのように追悼碑の細かい内容まで列挙するのを見ると、韓国人である筆者は次のように感じずにはいられなくなる。すなわち、筆者も「35年にわたる日帝強占期」に韓国人が受けた傷などは忘れて、これからは、未来の共生のために互いに協力すべきであるという感を強くするのである。

一方で、こうした追悼碑の詳しい内容を紹介している川田氏は、「この追悼碑は、日本人有志の手で建てられたものなのであろう」とも語っている。ここで、著者がこのように表現したところを一人の韓国人としてよくよく吟味してみると、文末が断定の言い回しの「ものなのである」ではなく、推量の「ものなのであろう」という言い回しになっているところが注目される。ここに、川田氏のどのような思いが込められているのか、大変興味深いところである。

ところで、最近、日本でも韓国でもともに、いわゆる「多文化共生の社会」を作り上げようとする雰囲気が高くなっている。ここで、視角を「多文化共生の社会」の方へと変えてみると、「14. 黒人であることーこの永遠の問題」、「15. 黒人であること」が投げかけ続ける問題」、

「16. 白い心、黒い仮面」、 「17. 黒い皮膚」の自己主張、二つの極限、「18. アイデンティティー、この“身元”不明の曲者」、という章を取りあげることができるだろう。

特に、「14. 黒人であることーこの永遠の問題」のなかで、川田氏は「黒人大統領の誕生」と題して、次のように述べている。

アメリカのオバマ新大統領を、アメリカ合衆国初の黒人大統領と形容し、規定することは、当のアメリカ合衆国でも、日本でも、世界で広く行なわれているようだ。「黒人」という規定の仕方は、ルイ・アームストロングのように、黒くなくても、コリン・パウエル元国務長官程度の淡い膚の色でも、アメリカでは「黒人」とみなされるようだ。オバマ大統領は、母親は米国生まれの「白人」だが、ケニヤ人留学生を父としているから、半分はアメリカに直結した「黒人」だといえる。(中略) 父親の出身部族ルオは、ナイル系に属する、元来は牛牧民だったが農耕民化した人たちで、(中略) とくに興味深いのは、ルオ社会には、機知たっぷりの雄弁の伝統があることだ。各自が慣習的にもっている自賛名をもとに、諺、諷刺的表現を駆使し、ユーモアをまじえて自己紹介する演説は「パクルオック」と呼ばれ、大勢が会合する席では、このスピーチの、何人もの掛け合いが競技として楽しめる。(中略)

たぐいまれな演説の名手としてのバラク・オバマの才能は、多分に父親ゆずりなのかも知れない。そして大統領選での自己紹介演説など、まさに「パクルオック」ののりでやるのが、ぴったりなのではないだろうか。(中略) いずれにせよ、文字に頼らずに生きてきたアフリカ黒人社会には、力強く巧みな弁舌に至上の価値を置く伝統が、現在まで広く受け継がれている [pp.161-162]。

今日、日本・韓国ともに国際結婚が流行して

おり、全世界的にみてもこのような流れがひっきりなしにつづいている。特にここで、川田氏が皮膚の色が違うということを言い訳にして、白人たちが黒人たちを軽蔑することは認められないところであると強調している点は、いわば「一つの地球村」となった今日の世界に生きる私たちにとって、さまざまな価値観を持った人々が互いを尊重しあって暮らすことに伴う問題を考える上で重要な手掛かりを与えてくれる。

川田氏は、「あとがき」のなかで、本書が完成するまでの経緯を次のように述懐している。

青土社の月刊誌『現代思想』2008年2月号から2010年11月号まで、足掛け三年、途中海外で他の仕事に忙殺されて4回休んだが、「日本を問い直す」という題で30回書いてきた文章に手を入れ、1冊にまとめた。十分に練られた構想が、初めからあったわけではない。大まかに設定した問題意識をもとに書き進み、思考が展開するままに書き継いできたので、自分でも予期しなかった言葉の連なりが生まれた。三年といえば、そのあいだに書いている私も変わる。今度初めて全体を通読して、三年だけでなく、それ以前も含めた私の彷徨が、このような文字列を生み出した、それなりの一貫性のなさを記録して世に問い、批判に曝そうと思った [p.359]。

たびたび記してきたが、筆者は川田氏の主催するフィールド・ワークに参加することができた。そこで、筆者はそれこそさうだるような暑さのなかで息も絶え絶えに足を動かし、足は棒のようになってしまった。しかし、そこで筆者は、文化人類学と関わりを持つものはもちろんのこと、川田氏の精神力を愛してやまない参加者の面々と出会い、それぞれが抱いた感想や意見を語りあうことができたのである。

前述したように、筆者は、2009年と2010年の8月15日、川田氏を尊敬してやまない10余人とともに、東京都内で三大国立慰霊施設と呼ばれ

る靖国神社・千鳥ヶ淵・東京都慰霊堂を順に巡ったという内容であった。いわゆる東京都内で三大国立慰霊施設をフィールド・ワークに参加したわけである。以上の三カ所で各々感じたことを多少記してみることにする。

靖国神社は6年前にも訪ねたことがあった。大鳥居の前までは順調に着いても、同本堂とか「遊就館」の周辺まではアプローチする気がなかったのが正直な心情であった。当時までは本当にそうだった。韓国人として日本人のように靖国神社の本堂で両手をあわせるのに躊躇する。

筆者が修士課程を踏んだ古都の京都には「平安神宮」をはじめ、数多くの神社がある。京都は観光地として世界中の人々によく知られているので、いうまでもなく韓国人もたくさん観光客としてたずねる人が多い。おおげさに言うと、大勢の韓国人観光客は神社で合掌をしないのが普通である。隣で暮らしていたある中国人も台湾人もほぼ同様であった。

そのような思い出が関東地域の神社に着いても同じ心的状態に至る。それは、「靖国の神」60%が飢餓に瀕したとしての死者であったという説があるけれども、韓国・台湾の国民たちの目に映られた靖国神社では、いわゆる「朝鮮暴徒」・「台湾暴徒」といわれるケースが多く、日本軍には「正義の軍」扱いであるといわれていると思われる。「遊就館」の中に展示された太平洋戦争に関連のある歴史の内容ないし「日本の特攻隊」の写真などを見学してから考えてみると、筆者だけではなく、大いに侵略された民族たちの心には、現代に至ってもそのような心情はあいかわらず残っているとしかいわざるをえない。ここで、一つの疑問が起こる。「果たして、『特攻隊』とは、唯一のカタミであるか」と。

にもかかわらず、川田氏の親切なフィールド・ワークに参加した当時は、韓日・日韓の歴史的な「醜い感情」は、ほんの少しも頭にも胸にもなくて、むしろすがすがしい気持ちいっば

いであった。つくづく考えてみると、このように気分転換をさせたことこそ川田氏の人類学者のすばらしい力によって可能なこととこの瞬間もつづいている。

普段、靖国神社近所の二重橋から皇居の間近に見ている途中、天皇の平癒を祈るため記帳にやってくる人々を見ることができたが、靖国神社に一回りしたら、靖国神社の近所に千鳥ヶ淵戦没者墓園があった。着いてすぐ一同は千鳥ヶ淵戦没者墓園へ参った。ここでは平和のフォーラムが主催した集いがあり、民主堂堂首の追悼の言葉を聞くことができた。こういう動きは毎年行われるといわれたことがあったが、2010年の2回目の見学の当時は、日本の仏教のある宗派の3人のお坊さんと50人ぐらいの信者たちが本堂の後川で名のない戦没者のために追悼・祈祷をしていた。同墓園から出て、葉が茂っていた桜並木の道を歩きながら参加者たちは、右側にある名前も知らない深い川の流れの美しさに感心したことだけだったので、そのほかの感想はあまりなかった。

しかし、日露戦争では、開戦15日目に銃剣のおどしのもとに「日韓議定書」をおしつけた日本は、朝鮮半島（今日は、「韓半島」と呼ばれる。）の主人公になったように各地に勝手に砲台を築き、鉄道や電信機関を占領し、軍用入夫となることを拒否した農民は「ロシアのスパイ」として、射殺・絞殺されていたという話を聞いて、多少心の傷が感じられた。一方、最後に同墓園で感じたのは、あの墓園全体が与えるよそよそしさだった。ここで、もう一つの疑問が起こった。どうして、同墓園の真ん中の建物の呼び方が「天皇陛下御下賜の陶棺」であるかと、その下に一体どこの国の遺骨が安葬されているかということである。

東京都慰霊堂の本堂の内部に筆者の目が引かれるもののがかなりおかった。それは、ほかならぬ左右の壁の最高の所に関東大震災と東京空襲の絵や写真がほこりの覆われたまま展示されていた。前述したように、かなり広い面積にそ

んなに立派な本堂を造り、震災による死者や戦没者の霊魂を追悼・慰霊するという施設で展示されるそれらをよりきれいに管理すればよほど良いことであるとおもった。もう一つ要望するんだったら、本堂の外に建てられた「朝鮮人虐殺追悼碑」の規模が予想したものより小さいという判断され、二つ目の願いなら、「洗心」という文字が刻まれた石碑の向こうの地下納骨堂が3月と9月の一日ずつだけ遺族と一般人が入ることができるという関連者からの伝言を聞いてから、この施設の運営方式にも惜しいところがあった。

以上の内容をまとめてみると次のようである。

このような追悼施設をフィールド・ワークすることによって、特に戦争とか災害の原因による死者たちの足跡でも「記憶 (memory)」する必要性を感じられた。いわゆる「追悼・慰霊」とは、他の言い回しで表現すれば故人を「記憶」ととどめることになり、これこそ、肉体的な腐敗のあと、記憶を再構成することであり、その結果成員の死によってもたらされた日本社会の不安を和らげることができると思われるからであった。たとえば、どこの国の人も個人が特に政治的な雰囲気とか戦争などによって急に生命を失ったことを思い出されば、筆者が巡った靖国神社・千鳥ヶ淵・東京都慰霊堂に彫刻されたことや書かれたことや展示されたことや話されたこと、あるいは写真に写ったものなどのイメージはより全体的なイメージを喚起することになると思ったあまり、しばらくの瞬間でも記憶ができ、たとえまったく出会ったこともない故人のために追悼しなければならないと思われた。特に、筆者が韓国人として東京都慰霊堂の「朝鮮人虐殺追悼碑」の前で、自分も知らずに感激してすぐ額づいて胸深く追悼の意を現われたことは、これからも永遠に忘れることのでき

ない点であるといえよう。後面で撮られたこの瞬間の写真が本書の283頁にのせているのをみたら、一方では、照れくさい感じがしつづいた。

川田氏は、さらにこう続けている。

三〇回の連載で、書こうと書いて書けなかったことも多い。日本統治下の朝鮮で徴兵され中国で戦死し、遺族も知らない間に靖国神社に祀られた人の娘と、神戸震災で出会った彼女と一緒に、彼女の父親の中国での戦死地を探す日本人の男性の、心のかよい合いの深化をきめこまかに描いた、日韓共同ドキュメンタリー映画『あんにょん・サヨナラ』（キム・テイル監督、『あんにょん・サヨナラ』制作委員会編、二〇〇五年）から私が受けた感動に書けなかったことは、とくに心残りだ。私の本では、戦争が生む悲惨への憤りを明らかにする必要を述べたが、この映画は、当事者双方の誠意ある努力が、憤りを赦しに変えることも可能だと、声高にではなく、だが日韓双方からの証言を通して、強い説得力を持って語りかけている、未来志向の作品だ [p.360]。

この引用文に関する感相談も触れたい気持ちはいっぱいあるが、ざんねんながら、筆者は、まだこの『あんにょん・サヨナラ』という映画を観たことがないので、これ以上の感想を記せないところは非常に惜しい。しかし、川田氏に「未来志向」と思わせたことがありそうである。だから、これからこの『あんにょん・サヨナラ』という映画を観るチャンスがあれば、ぜひ見させていただきたい。一回でも観ることができると、筆者自身の思いを紹介したいところは山のようにあるようである。

(A5版 361頁 2010年12月15日刊 青土社 本体2400円)